

タイトル：「亡の形」

著者名：和織

文字数：4,993

あらすじ：自称「マインドダイバー」の中埜燈子は、依頼を受けてある青年の意識領域へ潜入した。行き着いた先は、人の「精神の欠片」が漂う自由意識。彼はそこで少年の姿をし、血まみれの斧を手に、現実では失われたことを叶えていた。

中埜燈子は、眠っている佐山斎の額に、自分の掌をかざすように近づけた。例えて言うならそれは、その人間から発せられる電波に、周波数を合わせるような感覚だった。ダイヤルを回すように少しずつ調節し、ピタリと嵌った瞬間、入口は共有され、それと同時に、落ちるように潜る。そうして彼女は、斎の意識領域へ潜入した。

糸の千切れた斎の意識、その痕跡を辿って行き着いた先は、共通意識の更に奥の自由意識、中埜が知りうる中では、今のところ一番深い意識領域だった。迷子の意識は殆どの場合、共通意識を中心に彷徨っているが、斎の意識は、ずっと同じ場所に停滞しているようだった。共通意識という場所を、世界の全てが一処にバラ撒かれたような空間だと、中埜は捉えている。それはどこでも成り得、人類が目にし想像するもの、全てが存在する場所。しかし自由意識は、あまり人気のない観光地のように、人の存在は疎らで、距離がある。静寂なる混沌とした夜空に包まれたような空間は、ダリの描いた世界に、少し似ていた。

印象で言うと、共通意識が地球なら、自由意識はまさに宇宙のようだった。その宇宙には、人間の何よりも濃い感情や願い、「精神の欠片」が落ちてくる。夢や無意識や共通意識という幾重のフィルターによって濾過され、結晶となったそれらは、美しくも醜くも異形と化し、水の底を這うように漂っている。そして、そんな異形専用クラウドのような場所で、斎は一人遊びでもするように、人を殺していた。

「・・・・誰？」

血まみれの斧を手に、その小さな青年は、突然現れた中埜を見て首を傾げる。佐山斎の実年齢は二十二歳だが、潜在意識の中に在るその姿が、今の彼の真実だ。そこにいる彼は、十二歳の少年の姿をしている。

「私は、君のお父さんに頼まれて、君を迎えに来た」

そう言った中埜を、斎は無表情のまま見つめ返した。彼の足元には、首と胴体の離れた男の死体がある。それは少年によって創られた、彼の母親を殺した男の影像だった。

三ヶ月前、齋は自宅で倒れ、そのまま意識が戻らずに今も病院のベッドで眠っている。検査をしても、意識が戻らない理由は不明とされ、父親の正雄はいくつもの病院に掛け合ったが、どこも返答は同じだった。だから正雄は自身で、昏睡状態の人間を覚めさせる方法を、目覚めた事例など、調べに調べ尽くした。それこそ、霊媒やら宗教まで。そうして行き当たったのが、自称「マインドダイバー」の中埜燈子だった。

「あの子がこうなってしまったのは、私の迂闊な行動のせいなんです。妻の顔を目にする事は息子にとって、要するにパンドラの箱の鍵だったので。・・・せっかく、十年無事に過ごせていたのに、自分で台無しにしてしまいました」

依頼を受け、中埜が助手の川田と一緒に初めて正雄の家を訪れたときには、彼は既に疲れ切っているように見えた。目はくぼんで、髪は新聞紙みたいだったけれど、それでも尚、自分を責め足りないみたいだった。

正雄の妻、齋の母親の佳奈子は、十年前に殺された。そして母親を失ったショックで、齋は佳奈子に関する記憶までも、殆ど失くしてしまった。母親がいたような気はするけれど、彼の中で、その存在だけが白塗りになってしまった。まるで、見たことを思い出せない映画のように。正雄は、記憶は戻らなくとも、母親の姿を認識してほしいと思い、齋に「これがお母さんだよ」と佳奈子の写真を渡した。しかしそれを目にした彼は、パニックを起こした。医者はその挙動を、一種の防衛反応だろうと言った。だから正雄はこの十年、妻の姿が決して息子の目に触れることのないよう注意を払ってきた。けれど、たった一日の気のゆるみが、取り返しの付かない後悔となった。

正雄は酒を飲むときに、スマホに保存してある妻の画像を見返すのを習慣にしていた。週に一度だけ、いつもは自室で飲むのだが、その日は齋の帰りがバイトで遅いと知っていたので、リビングで飲み、ロックを解除したスマホを手にその場で寝入ってしまった。そして目を覚ますと、自分のスマホと一緒に息子が床に倒れていた。古い機種ですぐに充電がなくなる自分のスマホを、息子は充電してくれようとスマホに触れ、画像を見てしまったのだらうと、正雄は言った。

変わる事のない鍵穴にピタリと嵌った佳奈子の姿が、十年という年月が蓄電されたフラッシュバックとなって、齋を襲った。そしてそれが、彼の意識の糸を切ってしまった。糸を失った意識は、手放された風船のように、無意識以下の領域へ飛んでいき、彷徨い、殆どの場合、自力で帰ってくることはない。

「私の手を取ってくれば、一緒にお父さんのところに戻れるよ」

中埜は手を差し出し、少年に近づく。

「・・・どこにも行かない。だってこれは、戻ったらできないから」

そう言って斧で死体を指す齋に、中埜はため息をついた。確かに、無期懲役を受けた犯人は、獄中で自殺し、現実にはもう存在しない。けれどここで創る影像なら、何度でも簡単に殺すことができる。

「でも、そうやってずっとここに独りでいるのは、寂しくない？」

その問いに、少年は首を振る。

「寂しいのは、普通だし」

「普通？」

「普通だよ」

齋はそう言って、死体を見る。彼は自分の周りの一定の空間に、昔住んでいた家のリビングダイニング・キッチンを投影していた。リビングにソファとテレビ、ダイニングテーブルの奥にキッチンがあった。齋はテーブルの傍に立っていて、その足元に犯人の死体がある。佳奈子に恋い焦がれていたその男は宅配の配達員で、事件の日も佐山家に荷物を届けた。当たり前にかかれた扉から侵入し、男はあっという間に佳奈子を絞殺した。そして彼女の首を切り離し、頭部を持ち去った。そこに帰宅した彼女の息子が、母親の首無し死体の第一発見者となった。齋はその場で気を失い、目にしたものを消す為に、母を思い出すことをやめたのだ。

「ずっと寂しいと、それが普通になるでしょ」

その言葉と同時に、突然リビングにあるテレビがついた。そこに、ニュース映像が流れる。テレビ自体ではなく、それはテレビを見ている人間の視点からの映像だった。

『今月7日に起こったA市の殺人事件について、犯人によって持ち去られた被害者の頭部は、犯行当日に海に沈められていたことがわかりました。男はその動機について、「もう誰も彼女の顔に触れないようにしたかった」と供述しているということです』

アナウンサーがそう言ったところで、画面が切り換わる。今度は、女性一人と男性二人が話しているのを、ドアの隙間から覗いているようなアングルだった。男性のうちの一人は、今よりも若い正雄だ。だから他の二人も、佳奈子の親類だろうと、中埜は思った。

『あんなこと、言うなんて、信じられない……「楽しかった」なんて……』

女性は嗚咽と共にそう言い、正雄ではない方の男性が、彼女の背中をさする。

『あれが、「デートだ」って……「海の上で一緒に過ごして幸せだった」って、言ったんですよ、あいつ』

正雄が、喉を詰まらせて頭を掻きむしる。そこで、画面はまた暗くなった。

「自分だけ母さんのこと忘れて、ニュース見ても、誰が悲しんでも苦しんでも、事実をわかってても、ただ、気持ち悪くなって感じでき……犯人が死んだときでさえ、あんまり、何とも思わなくて、でもそういう自分が、一番気持ち悪い」

ダイニングテーブルの椅子に座ってそう言った齋の姿は、現在の彼に変わっていた。

「誰かの悪夢を、傍観してるみたいな感じだった。うまく逃げてた、苦しむことから。そうやって逃げ回ってるうちに、自分の手で叶えられることもなくなった」

「君は、自分を守ってただけだよ」中埜は彼の隣に座る。「実際に報復できなかったのは、幸いだと思うけど」

「そもそも、現実がああいう狂った奴に思い通りにされる世界ならさ、そんなものに何の価値があるのかな」

いつの間にか、切り離された男の頭部がなくなっている、と、中埜は思ったが、それは男ではなく女性の体だった。そこにあるのは、十二歳の齋が目にした光景だ。

犯人の男は海好きで、船舶免許を所有していた。男は持ち去った佳奈子の頭部を傍らに、二時間のクルージングを楽しんだという。その後、愛する人の顔を深海へと沈めた。裁判中に犯人は、「人生最高の時間を過ごして、もう何の悔いもありません」と、誇らしげに言った。沈められた佳奈子の頭部は、犯人の望み通り、発見されることはなかった。

「一人にしてよ。俺に拒否られたって、言えればいい。俺はもう、自分で自分を救ったんだよ、あの地獄から」

淡々と、齋が言う。

「じゃあその地獄に、お父さんは独りで置いてきぼりだ」

中埜はそう言って、彼の目の前に、自分の影像を投影して見せた。すると齋は、その忠実なイメージに釘付けになる。今の彼の精神では到底創ることができない、美しい母の姿に。

「私は、君のお母さんのふんわりとした雰囲気の中に、凜とした意志を感じるんだよね。あんな風に命を奪われても、汚されることのない精神、というか。でも今の君がお母さんを想って浮かぶのは、首のない死体だけでしょ。そんな場所に籠っているなんて、あの男の頭の中と、大して変わらないってことにならない？」中埜はそこで、佳奈子のイメージを消す。「このままでは君はいつか、何も考えない石になる。それがお母さんの笑顔を取り戻すことよりも、大切なことなの？ここはお父さんを絶望させてまで、手にしている価値がある世界なの？」

母親の姿を失った齋は、また少年の姿に戻った。「お母さん」と呟くと、その目から涙が、何かを必死に取り戻そうとするように、溢れ出てくる。

「寂しいのは、普通にはならない。人を失ってできた空洞は、埋まることはない。どうしたって、それが君だ。だから全部、自分で決めればいい。誰も君に命令する権利はない。だけど、君にはお父さんと話をする義務がある。全てはそれを果たしてからだ」

そう言って中埜は少年の頭を撫で、小さな手を、そっと握った。

齋が目を覚まし、病室が慌ただしくなったので、中埜と川田は一度退出した。中埜は体に上手く力が入らず、川田に支えられながら、座れる場所へと移動した。助手といっても、川田には中埜のようなスペックは全くない。彼女にスカウトされ、うっかり転職してしまっただけだ。

「体、本当に大丈夫ですか？」

川田が中埜の顔を覗き込む。

「ずっと、一番深いところにいたからなあ」中埜はそう言って、嵌るように椅子に座った。「あの子、ちゃんと全快するといいけど」

意識が戻っても、自我の乖離や記憶の欠如が全くないという保証はない。その後の回復

具合も、それぞれ人による。目覚めれば、全てがまた振り出しだ。

「戻ってくれただけで十分ですよ、家族からしたら」川田が過去を思い返してそう言った。

「ただね、俺としては、ちょっとでいいから、本人にも中埜さんのこと覚えててほしいなって、思いますけど」

中埜の意識は、ダイブ中は常時明晰夢のような状態だ。しかし通常人が記憶するのは、夢の領域までとされている。だから潜られた方は、彼女のことを覚えていない。

「覚えてる方が気まずいよ。私だっていつそのこと忘れたいし」

「やっぱり、さすがに今回、怖かったですよね」

「怖かったのは、あの子でしょ。でも本人が何より恐れていたのは多分、自分の苦しみを、人を傷つける方へ向けてしまうこと、だったんだと思う。今度は、一見平和だったこの十年を、夢みたいに感じるのかも」

「それでも、ちゃんと現実へ戻ってくれて、よかったです」

「ところで、これって本当に現実？」

「は？」

「一体どこの誰が、そう証明できるんだろう」

「ちょっと、やめてくださいよ」

「人の意識って、体と一緒に無くなると思う？」

「・・・ええ？」

「結局は世界って、外も中も、自分の「認識」か」

呟くようにそう言った中埜を見て、斎の中はどんな風だったのか？と、それを川田が訊こうとした瞬間、彼女は突然立ち上がり、肩を回す。

「ああ、久々、しんどかった。お腹空いたね。佐山さんに連絡だけ入れといて、どっかで食事してから戻ってこようか。働いた分きっちりもらわないと。多少、色つけてくれそうだよ、あの人」

先程までが嘘のように、中埜は颯爽と歩いていく。川田はその後ろ姿を眺めながら、これは間違いなく現実である、と確信した。